

志向性の社会学序説

—ある編集者の生き方をめぐって—

渡 辺 牧

本研究は、個人の志向性⁽¹⁾の構成に関して、聞きとり、文献調査を通じ社会学的理論化を行うことを究極目的とする。その序説として、本稿は一編集者の生き方⁽²⁾をめぐるモノグラフの分析から問題の発見を試みる。所属企業の支配的規範などがジャーナリストの生き方にどの様な拘束・影響を及ぼし、逆に個人が強いられるレヴィタンス、社会的条件をいかに変革し人生の改変を志向するかに関し、生活史に焦点をあて考察する⁽³⁾。

はじめに

ジャーナリストが生命線たる〈自由な精神〉を風化、頹廢、所属企業の意味体系にからめとられていく態度変更現象が雪崩の様に観察されたのは、近くは1970年代前半からであった⁽⁴⁾。ジャーナリズムの自由とは、そこで働く人々、読者のすべてに、少数、異端を排除することなく、言論表現の自由を保証・擁護することである。だが、合理化の推進と流れ込む情報の渦の中(斎藤〔1977〕)、「われわれ送り手主体のもので受け手のものでもない量的出版物とは一体誰のものなのか」(『秋田書房通信』—以下『秋』と略記〔1977〕17号)という一編集者の疑念が象徴する様に、その自由は空洞化し、ジャーナリストは自己疎外に見舞われていった。ジャーナリストだけではなく、自分が本来の自分ではない仮象の存在に感じられ、巨大システムに自己存在がからめとられていく危機を覚えた個人はいかにして自己の再生を図るべきなのか。

上述の問題関心に立脚しつつ、本論では最初に、編集者、Y.NのA社入社以後の生活史を3期に区分、その変遷をみる。次いで、A社の支

配的意味体系と彼の内部との葛藤関係を掘り下げる。A社勤務中の後期から、彼は人生の改変を図るが、その過程で大きな影響を及ぼした重要な他者との相互行為過程を分析する。彼のあべき編集者への模索は、これらの他者を媒介に焦点が絞られ、志向対象を明確化していったのである。

ジャーナリストに〔なろうとすること〕、〔生きつつあること〕、〔過去にその職にあった〕という生活史は、内的意味で必ずしも自明でない。肩書き—所属企業名、地位、担当領域、経歴などの地位役割の外的表徴、収入などの要素を析出することが、彼の生活史の本質開示の絶対的条件ではあり得ない。より根本的に、ジャーナリストの人生、人間、社会観が生活史の中でいかに変容し、その意味統一的帰結として、彼が人生での志向対象をいかに深めてゆくか—この問題究明は、ジャーナリストの浄化的反省⁽⁵⁾(*réflexion purifiante*)を媒介とする(Sartre〔1943〕)ジャーナリズムの人間主義化という地平で根底的課題であろう。ジャーナリストの属し信奉する(させられている)様々な意味体系とリアリティーを対象化し、それとの相剋において、個がいかにして自己固有のアイデンテ

ィティを求めた再生への《旅》に出立するのかを社会学的視座から考究しよう。

I 編集者としての生活史

Y.Nは1972年、K大を卒業、大手出版社A社に入社した。その時から現在までの生活史を時期区分すると3期に分かれる。

〔第1期—72年から75年までで商業主義への疑念胚胎の時期〕大学の学問には背を向け、学生演劇に自己解放の場を見い出していたY.Nは、マスコミに精神的自由と、読者との共感関係構築の期待を抱いてA社に入社。学習雑誌の編集実務を修得してゆく反面、A社の商業主義の圧倒的力に異和感と疑念を抱き始める。「子供のアイドル、ウルトラマンの幻想を打ち砕くため、《ウルトラマンはただのお話だ》との企画を出したが、原案会議を通らず、後に何人かの先輩社員から『その種の企画は無理だ』と言われた。原案会議が公的な企画討議の唯一の場なのに、子供の置かれている状況を問い詰める空気が皆無で、一定のあきらめが社内に蔓延していた。上司や同僚が無知なのではなく、彼らにも良いことをやっている訳ではないうしろめたさがあった。職場の編集者の大半がそれを口に表わせない背景には、子供の生活や文化ではなく、自らの保身を最重視する潜在的状況がみられた」(Y.N-I)。A社の意味体系と彼の内部との葛藤は、上述の様に、新人研修修了直後の72年7月、彼が初の編集企画を出した時、早くも顕在化した。A社の商業主義とは、「子供にわかりやすく、よく売れる、営業に評判のいい見とくれのいい本」に体现された。それは第1に、会社の以前の急成長過程で大量採用した反動として、少い物的人的投資による生産性向上の要請、第2に基幹商品の学習誌が学校販売できなくな

り、家庭への配達販売切り替えに伴い、2-3年間、部数が落ち込んだ点から、2重に変質していった。社の上層部は「合理化を考えないと先行き大変なことに」と社員のしめつけを強化。「政治的には右、左いずれからも文句が出ず、役立ちそう、と母親層にアピールする本作り」(I.S)が至上命題となる。編集過程をコマ切れ化した分業体制の徹底、外注制の大幅導入の中、「社員編集者の足腰は萎え」(『秋』(1979)31号)、編集者の内面から切り離れた雑誌作りが進む。

〔第2期—75年から76年までで労組運動に参加するが挫折した時期〕Y.Nは職場を支配する意味体系に異和を深め、75年、組合活動に参加。「組合結成の組織的目標は、労働条件是正と情実人事打破だったが、私は、編集権を現場へ取り戻し、学習誌の中身を根本的に変えたかった。組合が力をもつことで、企画、取材の自由が拡充するのでは、との願いがあった」(Y.N-I)。だが労組では「編集権問題は時期尚早」となり、さらに組合内の派閥抗争が始まり、大同団結はできなかった。76年、彼と背中合わせに机を並べていた一編集者がS湖で自殺した。「彼は労組設立当初からのメンバーで、地方営業所出向などのいやがらせ人事の数々を受け、死直前の仕事も閑職というより幽閉に近い」(『地匍人』—以下『地』と略記〔1976〕2号⁽⁶⁾)状態に置かれていた。通夜の手伝いに「何ら心触れ合うことのなかった職制サイドの人間たちが、上司の指示を受けるや否や、それまでの無感動の表情を一変させ、沈痛らしき顔つきを拵えて出かけていった」(同)ことは、彼に、人間の救い難い頹廃を感じさせた。編集の中身の棚上げ、社側の逆オルグの進行下、彼は「編集者の技術や文化を古典的な労働観で均質化、全労働者との連帯という巨大な幻想をもちこんだ」(同)労

組に失望、退組した。

A社は労組結成後、200人減を公言、急いで外注制を導入し、正社員の削減を中小編集プロなどの労働力でカバーし始めた。「そのプログラムの中では誰がやめても、社の方針には全く問題がない訳だ」(Y.N-V)。背景には、社員の高齢化と人件費増大があった。この種の合理化、生産性向上運動は70年代を通じ、日本の大手出版社の多くに共通している。A社では、「楽しい子供の本作り」の一側面を次第に切り捨て、「その本を読んだら成績があがる」即効性が、営業サイド、受験競争を意識する読者層の要請下、より期待されていく。「企画の切れ味、時代性の鋭敏な反映は売れ行きと無関係と営業サイドから言われる。例えば、公害記事を扱う際、右にも左にも批判されない様に配慮する全くの無思想の展開、要するに売ればいいとの考えを強いられる」(I.S)。「社内で、編集者として…とよく言われたが、実際は社員として…と全く同じ。社の内部事情を越えて、社会的に広がりを生む言葉として、編集者という職名が使われることはなかった」(Y.N-I)。企業にも労組にもアイデンティティを発見できず、企業外の世界との視点更新につながるネットワークは乏しく、彼は閉塞状況に陥っていた。僅かに、書評紙などから、地方出版社への関心をつのらせていた。

〔第3期-76年から現在までで視界を広げ志を具体化していった時期〕Y.Nは76年から「志ある編集者を体現する群れ」との期待を込め、地方出版社を訪ね始めた。A社の限界状況からの脱出路探索の第一歩だった。彼はそこで、編集者が全身をかけた本作りに励む現場を発見、その収獲を私的レベルに閉じこめず、他者との共有化、普遍化をめざした。自ら筆耕した孔版刷り個人誌『地』に、地方出版の探訪記録を掲

載、個人出版者、先達の編集者ら計70人に送ったのである。同誌は、閉塞状況にあったY.Nの社会的ネットワークを拡充、彼の生き方を転轍する重要な役割を果たす(森岡〔1979〕)。同年には、秋田書房のK.S、翌77年にはK.Sを通じ、生活、民衆史記録運動のサークル「山脈出版の会」の人々と出遇い例会に参加。77年、彼の意見表明、情報交流の場は、『地』から『秋』、出版の会のメディア『創』へと、より広がりを獲得していく。

77-78年の約1年半、彼は、新泉社、現代書館などの同世代の編集者と共に、出版流通の勉強会に参加。「全く未知の知識を得、A社以外の小出版社の人々とのネットワークが広がった。彼らは給料は安くとも、仕事を生活化して出版人としてのあり方を示していた。本の編集、販売に、飯の糧だけでなく、より切実な想いが感じられ、小出版社への憧^{あこがれ}憬をかきたてられた」(Y.N-VII)。彼は地方出版探訪、手応えある本作り、出版の勉強会を通じ、A社の外に視界を切り拓くと同時に、仕事の生活化を見果てぬ志としてゆく。81年、ついにA社を退社、差別と辺境問題をテーマとした書物編纂を志し、80年創業の小出版社P社に入った。P社代表、N.Hの多年の出版活動にみる志の高さ、闘う編集者としての生き方に共鳴する点が大きかったのである。次のII以下では、彼が内的葛藤を発条に立ち上がり、重要な他者との出遇いを契機に視界を広げ、志向性が深化していった過程を跡づけてみたい。

II 意味体系の葛藤⁽⁷⁾

1. 規格浸透の危機

「大手でしかも金もうけのための出版に署名性など本来無縁」、「金のためと割り切れ」、

「大手出版が必要なのは読者ではなく消費者」と説得を受けつつ、「志や姿勢のかけらもない会社の労働ではあっても、一定の感性や知性の供出は避けられない。それは計量化できず、ひたすら上滑りしながら放出されていく」(『秋』〔1977〕10号)中で、彼の内部は干からびていった。同時に月70万部発行のY.Nの担当学習誌は、彼の娘達をも読者とするメディアだった。所属企業との葛藤は、企業規範が無意識裏に浸透する形で、家族にまで屈折した影を投げかける。Y.Nは「紙屑以下」と思いながらも、無料入手できる自社のワーク・ブックを、国立大付属小に通う長女に、一時期何気なく渡し、娘も喜んでワークに取り組んでいた。やがて彼は、進学体制の歪みを直視、そうした行為を反省する。長女は、級友全員がA社を知っていることを素朴な意味で誇りにしていた。彼は娘の態度に当惑し、真実を伝えねばと、自社の雑誌での矛盾を娘に教えた。彼が編集した雑誌で、騒音問題に全く触れぬまま、新鋭ジェット機的设计図を掲載した頁などは、「肝心なことで本にのらないことが沢山あるんだ」(Y.N-I)と話した。だが、そうした会話で根本的問題解決はできない。「子供は身近なメディアの学習誌でも隅々まで確実に管理、規制されてきている」(同)が、自らその仕事に関与していることに苦悩を深める。

81年、A社退社の決意を妻に打ち明けた時、彼女は、将来への生活不安、世間体の悪さから強い衝撃を受けた。団地生活の主婦の間では、夫の勤め先が日常の話題に出るが、A社の知名度は高かった。何より、夫が大手のA社社員であることが、彼女に生活の安定をそれまで自明視させていたのである。後述する様に、彼が妻子を新たに入社したP社へ伴い、そこでの仕事を実感してもらった背景には、企業の知名度、

規模の大小に操られがちな身内の自然的態度⁽⁸⁾の問題が介在していた。企業規範—商業主義の極まりの無思想イデオロギー—の浸透に対し、彼は最後の一线を自らのパーソナルな抵抗で断ち切ろうと試みた。それは、人間としての矜持であると同時に、巨大メディアの制度的管理、規範の放出に対し、内部の一員がいかに脅威と危機を覚えるかを開示している。

2. 上司との葛藤

A社は、戦後の高度経済成長、教育の大衆化、受験競争の激化に対応して、この20年間に急成長した。「60年代半ばから、他の大手出版社なみに採用を開始、問題意識を抱いた人が続々と入社したが、それ以前の入社組の上層部は教材出版社のイメージで入った人が多く、8割方は児童文化論的な理解に乏しく、社会の動きにも鈍感」(I.S)。A社でY.Nの理解者だったI.Sは、Y.Nの葛藤が顕在化、対立関係に進む上司との関係を次の様に分析する。第1は、Y.Nに理解を示そうとして話しかけたり、自分の部署の学年誌に引きとるが、ジャーナリストとして根本的にずれた点から理解を示すため、究極的に仕事を通し対立するケース。第2は、全くマスコミの仕事の本質がわからず、編集長としての自覚がなく、もっぱらサラリーマン管理職として彼に敵対、片っ端から衝突するケース。彼の最後の直属編集長は「Y.Nが最重視していたマスコミのあり方、出版の良心とは全く無縁な人間で、杓子定規に部下を管理することしか知らない人物」(同)で、両者は喧嘩ごしの対立を続けた。

マスコミのあり方、良心を口にすることが白眼視され、根底的議論を表沙汰にしないのが〈大人〉とみなされる、凍りつく様な倒錯した光景がマス・メディアの一部では日常化しつつ

ある。Y.Nは、A社の意味体系を自明視せず、地方出版などの下位宇宙(sub-universe)での体験を傍証として、その解体作業に取りかかったが、A社の支配的規範からみれば、彼は幻想にとりつかれたドン・キホーテのラベルを貼られたであろう(Schutz〔1964:135-158〕)。彼が「他者の誠実さへの信頼」(Schutz〔1964:155〕)を社内の上司らに抱けなかった、この時の状況は悲惨さ以外の何ものでもない。組織目的遂行のため、形式、機能合理性を最優先する前述のタイプの中間管理職達は、言論表現自由の危機を看過し、経済的自由の独走に魂を呪縛されてしまった。そこからは、人間の声ではなく、機械の歯車の無情な響きしか聞こえてはこない。彼らも経済的に首根っ子を抑えられている企業内編集者だが、しかし、彼らは企業の意味体系に自己の実存をからめとられていったのではないか。

Ⅲ 重要な他者⁽¹⁰⁾

81年に入り、Y.Nは「34歳にもなり、もはや一刻も無駄にはできない」(Y.N-I)と退社の決意を固めた。その過程で、彼の生き方に影響を及ぼした重要な他者達と彼の関係性を、1次的影響者(以下prと略記)、2次的影響者(同se)という範疇を用いて分節化してみよう。prとは、彼自らが全面的には自覚化していない潜在的志向性を洞察、明示化して、新しい世界のありかを示唆した人々である。prはさらに、①個別具体的にP社への入社を助言したH.K、②あるべき編集者の姿を、より普遍的に身をもってみせたK.Sの2種に分節化できる。前者は特に彼の行為レベルに、後者は意思の深部に働きかけた。seは、①ある段階までは、ものが見えてくることを可能にするうえで影響が大きか

った山脈出版の会のM.Aに代表される人、②同僚として気心が通じ、率直にマスコミ論をかわすことができたが、知識、情報の交流にとどまり、それ以上の相互行為には到らなかったA社のI.Sに代表される人、③社内で良心をごまかし遊泳する人々、原則欠落のまま取材、執筆を行う人々など、彼がかつて相互行為関係にあった際、ブレーキ的、反面教師的役割が強かった人々に分かれる。次に影響者の特性をみよう。

〔pr-①〕81年初め、彼の退社後の選択肢としては次のものが浮かんでいた。(1)医学系出版社から、A社と同じ給与条件で副編集長として来ないかとの誘いがあった、(2)経済的条件はダウンしても、志ある編集を志向する出版社の門をたたき、(3)小さな編集プロを自営、力をつけてから出版社を興す。P社入社に最も影響を及ぼしたのは、出版関係団体に勤めるH.Kの「今さら回り道をしてもしょうがない。P社のN.Hの思想に共鳴しているなら行くべきだ。駄目でも元々だ」との助言だった。退社後の進路について、具体的で的確な助言をしたのはH.Kが唯一だった。Y.NがH.Kらの友をもち得たのは、(1)彼の巡り遇いを大切にする資質、(2)他者への誠実さ、(3)世俗的利達の断念による自他の内的解放への強い希いの3要因が析出できる。同時にY.Nは人生への志向性の深みで、H.Kと同質の核を培ってきたのではないか。K.Sを含め、この3人の志の底流には、傷ついた個の自発性の復権(日高〔1969〕)をめぐる共通性がみられる。

H.K(38)は、出版の会でY.Nと出会い、『創』の編集や本作りを共にしてきた。「相談されたのは医学系出版社の内定後で、あとは給与問題だけという時だった。その時、彼は本当にやりたいことを1本化するためA社をやめるつもりではなく、時間的経済的自由のメリットを考え

ていた。彼の生き方は俺の生き方と相当、置き換えが可能で、俺だったらそうはしない、と不満を拡大再生産する転身には反対した。あえて転職するなら、本当にやりたい所に飛び込むべきで、片一方のワラジを別のそれに置き換えても本質的解決にはならない」(H.K)。医学系出版社への転身を、形を変えた浮遊とみたH.Kは、目標への一途な専心を迫ったのである。彼の次の発言が、Y.Nを揺り動かし、生き方を変える直接的契機になりはしなかったか。「小出版社の自営をめざす転身は多いが、仕事の過半を1人でやるのが大変なため、企画が萎縮してゆく。書き手との絆など多くの面で恵まれた人以外、その種の転身は困難だ。書き手、読者との強靱な絆を築いてきたN.Hのもとで、道を究めることを勧めたい」(同)。

〔pr-②〕1976年、地方出版探訪の途次、Y.Nは秋田書房のK.S(31)と出会う。K.Sは「他者の喜びを自分の喜びとし、自他を生きのばしてゆく内面の作業」と編集を定義、「民衆の意見や提言や体験を総体にコミュニケーションさせ、その反復をできれば普く、相互に、不断に連続」(『秋』〔1975〕1号)させることをめざし、75年、同書房を秋田県二ツ井町に発足。彼からY.Nは、編集者としての思想形成の重要なヒントを得た。Y.Nは「地方出版社の本を掘り起こすのは在京文化人、流通業者らではなく地方の関係者であるべき」こと、「掘り起こされるべきは在京出版関係者、都市生活者の意識」(『地』〔1976〕2号)であることを痛感。「東京がいかに見晴らしの悪い所であるか感じさせられた」(『秋』〔1976〕11号)との便りをK.Sに出した。自他の心の解放をめざし、「出版する1冊1冊に精神の刻印を打ち込んで歩んで行きたい」というK.Sの生き方は、出版活動と編集者の生き方を支える内面とが2元的に分離し

ていない、編集者のあるべき姿を示唆していた。

Ⅳ 実存的再生を求めて

1. 個人誌発行と地方出版探訪

『地』の76年3月からの刊行は、「無限定な意識の搾取に歯止めをかける」ことと、「印刷、内容両面での肉声性がかすれていく出版の大勢に抗う志向性」(『秋』〔1977〕17号)に根ざしていた。さらに、彼の企図を個的事情に留めるのではなく、感覚の共有、個の連帯を図ることで、公的事情へ止揚したいとの希いが託されていた。創刊号には、長野市の銀河書房のルポを掲載、金の心配に追われる地方出版の経営難、年間収益の6割を委託業務から得ている実態—などの理念と実態の開きを指摘。まだ、この段階では、地方出版の世界に、彼自らの生き方の問題解決の直接的手掛かりは発見できない。だが、彼はこれを媒介に、大手商業出版の経営論理に内在的批判を加える視点を確立していく。「地方出版社が最も重視すべきものは、書店、流通業者、図書館、マスとしての読者ではなく、顔の見える読者との関係づくりである」(『地』〔1976〕1号)。

現在からみた、当時の地方出版探訪の意味を、彼は「少い人数で本作りに真剣に取り組む人々のトータルな関係性を見せてもらった。芝居の稽古を始め、できあがるまでの心の自由、解放感、手応えが、営みとしての地方出版社にはあった。反面、最低限の人員の小さな社内できえ、確執、分裂、破綻があり、退社する若者達がいいたことは失敗だと思っていた」(Y.N-VII)。76-77年にかけて、彼が訪ねた地方出版社は、北は秋田県から南は福岡県まで広範囲に及び、A社に勤務中の休日利用の旅だったことを考えると、自己の限界状況を超克せんとする強い衝動

(11)
がうかがわれる。

2. 自発性に根ざす書物編纂

Y.Nは、山脈出版の会の通信『創』の編集を、第11号(78年2月発行)から担当した。「編集者とは企業の枠を超えたある価値の提出者ではなく単なるコンペ型⁽¹¹⁾の労働を強いられる。読者に対しては企業内事情をどこかで超えた向き合い方をすべきだろう。そのために必要なことは、より個人的な事情を追求するという作業である」と、同号で、彼は仲間へのメッセージを伝えている。同会の活動の中で、彼は内的自発性に根ざした書物を初めて編纂することができた。北九州の小学校の恩師で、児童演劇、民話採集などの仕事を続けてきた加来宣幸の著作『筑豊流域から』(79年9月刊)、『ふとい文字で書いておくれ』(80年10月刊)の2冊である。Y.Nが2,500枚の原稿を自宅に持ち帰り、1年がかりで編纂した『筑豊流域から』のタイプ打ちは、主婦タイピストのH.Uが担当。彼女は「世代を継いで語る会」の熱心な組織者でもあり、決して楽とは言えぬ生活の足しにとタイプ打ちを始めた。Y.Nは「経験が浅く、幾分技術の未熟さはあるというのだが、こうした本を打つには最適の人。われわれは、できれば、こうした内的必然性の絡む技術者たちとの協力で仕事を仕上げたい」(『創』〔1980〕26号)と、仕事のパートナーとの内的絆を重視している。著者の加来は、20数年前、Y.Nが学んだ小学校で、「芝居の幕引きを教室の端から端までやってみせ」、教室が劇場にも変わることを教えるなど、情熱あふれる青年教師だった。「語り手として子供と向き合う」真摯な努力を怠らなかった旧師の著書編纂作業は、彼に遠い少年の日の感動を蘇えらせると同時に、作りたい本を自ら作る自己充足の貴重な体験となった。

3. たった1人の通過儀礼

終身雇用制が根強い日本社会では、入社式などは、生活史の枠組をほぼ確立した成人に、公的なゲゼルシャフトでのアイデンティティを植えつける通過儀礼的な意味をもつ(米山〔1976〕)。組織内での意味体系を正当化し伝える儀式の受容は、分業体制に対応した社会規範を成人が内在化していく第2次社会化⁽¹²⁾の節目となる。だが、内発的志向性を人生の起点とする時、儀礼の意味は一変する。A社退社後、Y.Nは子供を同社に伴い、どういう会社で、どんな仕事を彼がしていたか、やらざるを得なかったかを説明した。さらにP社入社後、妻子を連れていき、「ここが、これからお父さんの働く職場なんだよ」と新しい仕事を実感してもらい、第1歩を踏み出した。

彼は第2次社会化に伴う社会的規範の受容を自明視せず、それを組み換え再構成した。即ち、彼は、多くの人々が、安定した制度的枠組下で未来を見通せると、自明視する道を内在的に相対化した。彼は、社会的世界の移行に伴い、知識の社会的配分を家族と共有化することを媒介に、旧世界の無効化と新たな世界の正当化を企図したのである。彼の行為からは、A. Schutzの言う内発的レリヴァンス(volitional relevance)を、生の中で自ら構築してゆく姿がうかがわれる。それは、大手出版社での強いられたレリヴァンス(imposed relevance)に包囲された仕事の終焉を死とみて、新たな小出版社での仕事に彼自らの再生を賭けた、たった1人の通過儀礼であった。

V 新しい世界との出遇い—闘う編集者達

1. 開扉

H.Kの助言のもと、Y.NがP社のN.Hに初め

て対面したのは81年4月下旬。「A社をやめたい。志望者が沢山いるだろうし、私はガキ相手の編集をしてきた人間で使い者にならぬかもしれないが、ここで働かせてもらえないか」(Y.N-Ⅳ)と頼みこんだ。この時のN.Hの返事は「志望者が多く断わっている。また来てほしい」(同)。70年代末から、Y.Nは『地』、『筑豊の流域から』などをN.Hに送り、「とうとうとした濁流にすべての出版作業が押し流されていく状況の中で、あなた方の活動がどんなにささやかであろうと、嬉しい光明であることにちがいない」(『創』[1980]28号)と励ましの便りを得ていた。対面は初めてでも、N.Hは、Y.Nの資質、人柄、志向性の輪郭がかなり脳裏にあった。最初の対面時に、N.Hは「Y.Nは『地』発行、サークル出版を行うなど、ゲリラ出版ができる。組織、肩書きでなく、裸で仕事をする人だ」と社内にはいた人々に紹介。Y.Nに好意的だったが、好意だけではP社の扉は開かれなかった。

5月の連休明け、Y.Nは、A社時代の経過、N.Hの存在の意味を書き、「1回しかない人生で、この機会を何としてもつかみたい。当分、何とか食いつなげるから金銭の問題ではない。もう1度考えてもらえないか」と、10数枚の長文の便りをN.Hに出した。Y.NはA社の社外に出る時間的自由には厳しい制約があった。このため、この時だけでなく、重要な問い合わせ、依頼事など、頻繁に、ジャーナリスト、地方出版社などに手紙を出し続けた。Y.Nにとり、手紙は社会的世界を切り拓く重要なコミュニケーション手段だったのである。P社では、Y.Nの手紙と履歴書を専従者4人で回し読みしたうえ決をとり、採用が決まった。「手紙1本で採用が決まった様なもの」(Y.N-Ⅳ)と、一つの手紙がK社の扉を開いたのである。

2. 無数の民への想い

Y.NはA社時代、出版ジャーナリズムが読者を愚弄しているのではないかとの危機意識を深めた。P社のN.Hは、読者への信頼、思い入れがY.Nの予想以上に極めて強かった。「N.Hの読者への思い入れは、今日の出版界、著述家に最も欠けていることだ。それをP社で、一般書の出版活動として成り立つという実績を築くことは、日本の出版界でほとんどやってこなかったことだ。部数は少くとも、質の面で大きな実験をこれから試みることになる」(Y.N-Ⅷ)。

P社のある東京のM町は、中小の印刷、製本会社、出版社が集まっている。赤提灯で編集者が顔馴じみの製本屋さんとはったり出くわし、杯をかわしながら、少量の紙の裁断を頼むなど、「人間の肌の温もりが感じられ」(Y.N-Ⅷ)、まだ心のどかさの生きている街である。P社では、多忙な業務に一息つく時、出入りの業者、読者などを交え、「日本の民たち、深遠でも広大でもない暮らしの日々に生きなずみ、しかしなおおのれ自身を生きることを真摯に求める無数の民たち」(N.H)への想いが語り合われ、野における〈私の大学〉(ゴーリキー)の観を呈する。N.Hは「今の若い世代にも素晴らしい人がいるが、多くはみんな齢をとり大人になって、つまらない人間になってしまう。青年が大人2世ではだめなんだ。俺たちを越える人間をなぜ志向しないんだ。Nさん、俺を乗り越えていてほしい」(Y.N-Ⅱ)と語りかける。読者への強い信頼を原点として、闘う編集者N.Hらとの共感構造の中で新たな仕事を始めたことは、Y.Nにとり時代を生きていく大きな意味となるだろう。

3. 自由の証し

Y.NのP社での仕事は、①新雑誌、単行本の

編集企画、②著述家への原稿依頼、③読者の会などの世話、④読者、著述家達への書簡執筆（P社では、N.Hは1日平均10通程、Y.Nは3通程の便りを書いている）、⑤読者にP社の書物を郵送するための宛名書き、梱包、積み降ろし—P社は読者への直接販売を重視—などである。「今日は終日、知的労働は皆無で、ずっと力仕事。日刊紙の書評担当に書物郵送のための宛名書き、梱包。次いで新刊が1冊完成したので、午後5時まで積み降ろし。こういう力仕事は頻繁にある。A社では肉体労働は全くなかったから、これは大、小会社の違いだ。肉体労働で時間がなくなり、喫茶店で少し企画を練ったりしたくなる。社では時々静かになる時もあるが、ワサワサしている時が多く時間の寸断はいかんともし難い。しかし、四の五の言っても見通しはない。これらの実態をすべてのみこみ仕事していかねば」（Y.N-V）。

81年12月中旬、秋田から上京中のK.Sに、彼は「Sさんには今更と思われようが、小出版社の仕事は編集だけでなく、カバーのかけ換え、梱包、営業など、何でもやらなければならない大変だ」（K.S）と語った。分業化が徹底化していないだけ、異領域の仕事が入ってくる。しかしY.Nは「A社時代は、賃金と交換に疎外された労働をしているとの感覚がすべてだった。今は働いていることが自由の証しであり、自分の内発性で働いていることから心の解放が感じられる」（Y.N-VII）。

4. 差別と辺境問題に向けて

Y.Nの志向性は具体的には、差別と辺境問題の解明に向けられている。「古典的意味でのアイヌ、朝鮮人、被爆者問題はあるが、今から将来に渡り、もっと違った形、巧妙な形で、被差別者が作られていくのではないか。被差別者が

どういった状況、階層に追い込まれ、どんな問題性が深部にあるのかをつぶさに検証したい。差別問題は、女性、障害者問題など、定例化した形で処理され、風化と消耗度が速い。被差別者の声を、これから作る本すべての中ですくいあげてゆきたい」（Y.N-VIII）。

十数年前、劇団三田での5年間、「どんま」、「墓場なき死者」のカノリス役を演じ、裏方ではチラシ、パンフ作り、台本のガリ切り、ポスター貼り、資金集めに夢中になっていたY.N。彼の他者への誠実さが最も象徴的なのは、同劇団の旧友達に「私たちにとって劇団三田の〈時代〉はその後の10年間に様々な影響を与えにちがいない。ひとつの芝居を作り上げる〈力〉と生活を生きる〈力〉とは無縁でなかったと思える。私たちにとって劇団三田の〈時代〉は何だったのか。演劇とは何だったか」（『劇団三田』（1980））という主旨の案内状を79年6月送付、1夜の集いを持ち、その詳細な記録を80年秋に1冊の書物に編纂、発行したことである。人生の各季節を人は自分なりに精一杯に生きていく⁽¹³⁾（見田〔1979〕）ことが、自発性に根ざした生き方ならば、彼は出遇った人々に対し、そして自らの過去の生に対して、誠実に向かい合おうと、最大限、努めてきたのである。彼は、上述の書『劇団三田—ある学生劇団・そして10年』の〈編集の終わりに〉で書いた。「一握りの人に向けて、その関係性の証しとして出版とか編集の作業を考える私にこの1冊を作る機会を与えてくれた劇団三田の真情あふれる多くの仲間、編集の終わりに心からお礼を言います」。

彼はかつて演劇に真情を込め、その後志した出版の世界で1度はしたたかに傷つき挫づいた。A社の内部でのレリヴァンス⁽¹⁴⁾に操られる中、「対自に対する対他の優越性」（竹内〔1963〕）という受苦を自らに刻み続けた。絶望と焦燥が自

己を苛む日々の中で、彼は仮象ではなく、自己本来の生の手応えを求め、他者に自己を開き、受苦の乗り越えを企図した。

内部の傷痕を癒すことはY.Nにとり、決して安全地帯への逃避ではなく、傷痕自体を対象化し、あらゆる力を尽して闘うことであった。差別問題に生涯の課題として取り組んでいることは、《差別》こそ、彼にとって自他の解放をめざす切実な課題であったことを物語っている。彼は、『劇団三田』の編纂作業を1年がかりで進めた末に、ゴドーを待ちながらエストラゴンがふと熱く語る場面を想い起こす。「俺たちはまだやっていけるんじゃないか」（『劇団三田』）。その台詞は単に劇場内に閉じ込められるものではなく、彼の実人生を励まし、勇気づける言葉だったのである。

おわりに

Y.Nにとり、A社時代、「生活の安定」という社会的規範は決して自明ではなかった。彼の内部の相剋からの解放は、「安定」という名の規範により曇り、阻害されていた。彼が志の曖昧化、凍結ではなく、具体的深化の方向へ歩み出すことができたのは、障壁を乗り越えていこうとする際の粘り強さと同時に、重要な他者達との出遇い、相互行為を深いレベルまで営み得たことが1要因である。他者との出遇いを大切にする真摯かつ誠実な生き方、自らの言表一行為の曇りなき率直さは、彼の身近な状況内に、彼と同じ様に他者存在を大切にする、良き協力、支持、理解者を生んだ。さらに、＜強いられた運命＞の操りに抵抗する人間が陥りがちの独善性、現実遊離、高踏主義に陥ることなく、彼が志を深め具体化できた根底的要因としては、功利ではなく信義を自他の関係性の原点に据え続

けたことが析出される。個人が人生の波に洗われながら、世界への志向性と体験レベルでの内的葛藤（Laing〔1960〕、Berg〔1963〕）の果てに、あるレリヴァンスを放棄し、別のそれを志向対象として明証化していくことは、「あれもこれも」の欲望自然主義ではなく、意識の自発性に根ざした「これが自分の人生で1番大切なことなのだ」という心の打ち込み方、即ち専心に関わる問題—専心の視座、方法、対象が問われることは言うまでもない—である。自己にとって最も大切な志向対象に心を打ち込む時、他の欲望は視界から自ずと姿を消していく。個人が心を志向対象に打ち込んで生きていくことは、現代社会における欲求の収斂、高度化、昇華⁽¹⁵⁾をめぐる問題と同時に、組織などの管理、操作、強制に対して、自分が自分らしく、生き生きと生きてゆく道の探究に通じていよう。

現代のマス・メディア企業体では、企業内ジャーナリストが自己の内部から湧き出る声に耳を傾けながら、取材、表現活動を企画、実現することは至難である。だが、至難さは不可能を意味しない。Y.Nは、困難な状況の中で、ジャーナリズムの仕事を通じた自他の解放をめざしてきた。彼の生き方の軌跡は、他のジャーナリストの生き方を考える際に参考になる点が少なくないと思われる。

注

(1) フッサールは志向性について、Noesis（志向作用）、Noema（志向対象）という概念を提示しているが、本稿では、志向性を「個人が、人生の目標、目標実現の方法をめぐり、生活史の中で視点更新をとげつつ、目標に向かって接近してゆこうとする意思」と定義しておきたい。

(2) 社会と個人の関係をめぐり、後者の側から個人の＜生活＝生き方＞をさぐることへの着目では、水野

- [1978]24巻, [1979]25巻参照。
- (3) 聞きとりは1981年9月-82年1月にかけて行ったが、データ・ソースは以下参照。
- ① Y.Nから-9月26日(I)。11月18日(II)。同21日(III)。同23日(IV)。同27日(V)。12月11日(VI)。同17日(VII)。同25日(VIII)。1月26日(IX)。この中で、IIではP社代表のN.H, VI, VIIでは、N.H, T.I(販売担当), T.G(編集担当)からの聞きとりも同時に行った。
- ② Y.NのA社退社以後の進路決定に最も直接的影響を及ぼしたH.Kから-12月3日。
- ③ Y.Nが編集者の実践的理念をめぐり、影響を受けた秋田書房のK.Sから-12月28, 29日。
- ④ Y.NがA社時代、生活、民衆史記録運動で影響を受けたM.Aから-12月21日。
- ⑤ Y.NがA社勤務中、社内でよき理解者だったI.Sから-12月20日。
- (4) 本稿は、渡辺[1977]の論文の問題関心を起点としている。
- (5) J.P. サルトル[1943]は、〈浄化的反省〉を、〈不純な反省〉(réflexion impure)および〈共犯的反省〉(réflexion complice)の対立概念としている。
- (6) 『地』の刊行年月は次の通り。第1号(1976年3月), 2号(同6月), 3号(1977年5月), 4号(1978年1月)。
- (7) 意味体系の葛藤、遍歴については、P.L. バーガー[1963=1979]参照。
- (8) ここでの自然的態度の語義は、H.R. ワグナー

[1970=1980]の言う「生活世界は自然的態度の世界である。そこでは物事は自明視されている」という意味である。

- (9) 本多勝一[1974]は、企業内ジャーナリストにタブーを成立させている最も重要なからくりは、経済的抑圧にあると指摘する。
- (10) 重要な他者(significant others)と、重要性の少ない他者(less important others)については、P.L. Berger & T. Luckmann [1966=1977]参照。
- (11) Y.Nが訪ねた地方出版社(一部は地方紙の出版部)は次の通り。秋田書房, 秋田文化出版社(以上秋田県)。崙書房(千葉県)。銀河書房, スタジオユニーク, 信毎書籍出版部(以上長野県)。巧玄出版, 北日本新聞出版局(同富山県)。静岡新聞出版部。葦書房(福岡県)。
- (12) 第2次社会化については、P.L. Berger & T. Luckmann [1966=1977]参照。
- (13) 見田[1979]は、「青春は青春として、朱夏は朱夏として、白秋は白秋として、固有のロマンを行きつくすというゆき方をぼくは選びたい」と述べている。
- (14) レリヴァンスについては、A. Schutz [1962], 江原[1981]を参照。
- (15) 真木[1976:294-295]は、「市民社会の存立の原理としての利害の普遍的相剋性は、欲求の禁圧と制約によってではなく、欲求の解放と豊富化によってはじめて原理的にのりこえられる」と述べる。

文 献

- 『秋田書房通信』1975-1977 第1号-17号 秋田書房(所在地=秋田県山本郡二ツ井町)
- Berg, J.H.V.D. 1963 Divided Existence and Complex Society: An Historical Approach = 1980 早坂泰次郎訳『引き裂かれた人間・引き裂く社会』勁草書房
- Berger, P.L. 1963 Invitation to Sociology = 1979 水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』思索社
- Berger, P.L. & Luckmann, T. 1966 The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of knowledge (テキストとしては、1979 Penguin Books 使用) = 1979 山口節郎訳

『日常世界の構成』新曜社

江原由美子 1981 「シニョツにおけるレリヴァンスの問題をめぐって」『社会学評論』127号(32-3)

『劇団三田—ある学生劇団・そして10年』1980 劇団三田出版の会(発行所所在地=千葉市園生町)

日高六郎 1969 「戦後日本における個人と社会」『岩波講座哲学5(社会の哲学)』岩波書店

本多勝一 1974 「報道と言論におけるタブーについて」『講座現代ジャーナリズムⅤ』時事通信社

Husserl, E. 1936 Die krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie=1970 細谷恒夫訳「ヨーロッパ学問の危機と先験的現象学」『世界の名著』51. 中央公論社

Laing, R.D. 1960 The Divided Self: An Existential Study in Sanity and Madness, Tavistock Publications Ltd=1971 阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳『ひき裂かれた自己=分裂病と分裂病質の実存的研究』みすず書房

真木悠介 1976 「「共同体」のかなたへ」『展望』9月号(テキストとして、『気流の鳴る音—交響するコミュニケーション』筑摩書房を使用)

見田宗介 1979 『青春 朱夏 白秋 玄冬—時の彩り・88章』人文書院

水野節夫 1978 「H・P・ドライツェルにおける役割論の展開(上)」『社会労働』第24巻第1・2号

水野節夫 1979 「初期トーマスの基本的視座—『ポーランド農民』論ノート(1)」『社会労働』第25巻第3・4号

森岡清志 1979 「社会的ネットワーク論—関係性の構造化と対自化」『社会学評論』117号(30-1)

斎藤茂男 1977 「同時代を共有する人間として」日本新聞労働組合新聞研究部編『新聞が危ない!—現場からの報告・討論』晩聲社

Sartre, J.P. 1943 L'Être et le néant, Gallimard=1956 松浪信三郎訳『存在と無』人文書院

Schutz, A. 1962 Collected Papers I, ed by Natanson, M. Martinus Nijhoff

Schutz, A. 1964 Collected Papers II, ed by A. Brodersen Martinus Nijhoff

『創』1980 第26-28号 山脈出版の会(発行所所在地=東京都新宿区)

竹内芳郎 1963 「サルトルにおける〈全体性〉の思想—〈弁証法的理性批判〉の成立まで」『文学』5月号
(テキストとしては、同論文を改題した「サルトルにおける「全体性」思想の形成について」『実存的自由の冒険—ニーチェからマルクスまで』現代思潮社を使用)

『地匍人』1976-1978 第1-4号 個人誌(発行所所在地=千葉市園生町)

(Ed. by) Wagner, H.R. 1970 Alfred Schutz on Phenomenology and Social Relations, selected writings, The University of Chicago Press=1980 森川真規雄・浜日出夫訳『現象学的社会学』紀伊国屋書店

渡辺牧 1977 「言論の可能性—流れに棹さず精神」『新批評』第4号

米山俊直 1976 「人の一生」『講座・比較文化4(日本人の生活)』研究社

(わたなべ おさむ)